

飯村丈三郎

ほうおんかんしゃ じっせん
報恩感謝の実践家 下妻市・筑西市・水戸市



(茨城新聞社提供)

嘉永6年(1853) - 昭和2年(1927)。真壁郡黒駒村〔下妻市黒駒〕生まれ。幼名は縫三郎。幼少期に近くの黒子村〔筑西市板橋〕の千妙寺に預けられ、亮天僧正から多大な影響を受ける。その後儒学者の菊池三溪に学び、上京する。明治10年(1877)に故郷に帰って家督を継ぎ、戸長に任命される。また森隆介らと「同舟社」を結成し、民権運動を行う。明治14年(1881)には県会議員、その後衆議院議員となり政界で活躍する。また川崎八右衛門の後援を受けて、第六十二銀行の再建や水戸鉄道(株)の取締役として鉄道敷設に尽力し、いはらき新聞社〔茨城新聞社〕の社長として長年経営改善に努力する。さらに茨城中学校〔茨城高校〕の創立など教育界でも業績を残す。

飯村丈三郎は、^{ま かべぐんくろこま}真壁郡黒駒村〔^{しもつま}下妻市黒駒〕の代々名主を務める飯村家の長男として生まれました。幼いころは病弱でしたが、父はこれからの時代は視野を広げるために学問が必要だと考え、丈三郎を黒子村〔筑西市板橋〕の千妙寺というお寺に預けました。

ある時、^{じゅうしやく りょうてんそうじょう}住職の亮天僧正から「^{しゅじょう おん}衆生の恩<すべての生き物から与えられる恩>」ということについて話を聞きました。それは「人は恩を知らなければならぬ。これは人が生きる上で^{もつと}最も大切なことだ。」という教えで、丈三郎はこの話にたいへん感動しました。(僧侶になって、多くの人にこの恩のありがたさを知ってもらおう。)

そう考えた丈三郎でしたが、飯村家の^{あとつ}跡継ぎと考えていた両親から反対され、お寺から^{つ もと}連れ戻されてしまいました。しかし、亮天僧正の教えによって、丈三郎は(今日ある自分は他の人々の恩によるもので、それに感謝しなければならない。)と考え、その教えは、丈三郎の「^{しょうがい しんじょう}報恩感謝」という生涯の信条になりました。

県会議員や国会議員として活躍していた丈三郎でしたが、明治16年(1883)、当時の^{けんれい}県令〔^{ちじ}県知事〕から、^{けいえい}経営が行き詰まっていた第六十二銀行〔^{とうどり}常陽銀行〕の頭取として銀行の^{さいげん}再建に力を貸してもらいたいという^{ようせい}要請を受けました。丈三郎は「自分は若くて、^{けいけん}経験もお金もない。」といったん^{じたい}辞退しましたが、^{かわさきはち えもん}川崎八右衛門 (P.23 参照)が^{さんしょう}お金を出すことになり、引き受けることにしました。(それならば、せっかくの機会だから亮天僧正の教えを実践してみよう。)

頭取になった丈三郎は、銀行で働いている人たちの力を信じて、「^{しよくん}今後は諸君の力を借りて銀行の^{さいげん}再建を^{はが}図りたいので協力してほしい。」と語りました。自分たちが^や辞めさせられるのではないかと思っていた銀行の人たちは、丈三郎の言葉に感動し、銀行のために^{いっしょうけんめい}一生懸命動きました



「報恩感謝」の碑 (茨城高校内)

た。その結果、銀行は5年ほどで立ち直りました。また、明治24年(1891)から昭和2年(1927)まで茨城新聞社の社長にも就き、当時、経営が苦しかった新聞社を見事に立ち直らせてもいます。

大正12年(1923)に水戸に移り住みましたが、白内障にかかりほとんど眼が見えない状態となってしまいました。それでも、当時は県立の中学校は一つ〔水戸一高〕しかなかったので、そこに入学できない生徒を何とかしたいと教育の分野でも役に立ちたいと思っていました。

(自分は今までに多くの人からたくさんの恩を受けてきた。その恩に報いるよう報恩感謝の精神を实践したい。そのためにも、学校を創設して、少しでも多くの人に教育を受けてもらうことが必要である。)

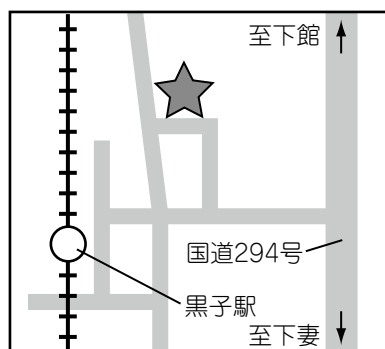
丈三郎は、自分の財産を投げ打って中学校設立のための費用にあてました。昭和2年(1927)4月に茨城中学校〔茨城高校〕は開校しましたが、最初の入学式で丈三郎は「この学校を設立した目的は、全く、報恩感謝の念をもってつくったものであります。…ただただ報恩の念を忘れなかったからだと思います。」と話をしたとのことでした。

ゆがりのスポットに行ってみよう

東睿山金剛寿院千妙寺

所在地 筑西市黒子214

内容 飯村丈三郎が幼少期に預けられ、亮天僧正より衆生の恩を教えられた寺です。



おもな 参考文献

『郷土史にかがやく人びと』（青少年育成茨城県民会議・1971）

『飯村丈三郎伝―生誕百五十年記念―』（西村文則・2003）